



創価大学

Discover your potential  
自分力の発見

# 創立50周年の創価大学像と 創価大学グランドデザイン

2010年4月1日

SOKA

UNIVERSITY

## 創立 50 周年の創価大学像と創価大学グランドデザイン

2010 年 4 月 1 日

### はじめに

本学は、1971 年に開学した。当時は、学生運動の高揚と瓦解のプロセスを経て、大学の存在そのものが喪失感に覆われた時代であった。創立者池田大作先生は、大学の変遷を歴史的に俯瞰して、本学の設立の意義をこう語られた。

「文化的創造の源であった大学もまた、深刻な崩壊の危機に直面している。(略)この終わろうとしているひとつの時代から、次の新しい時代の開幕のためには、新しい大学が必要でありましょう」(1973 年 7 月)そして「創価大学の『創価』とは、価値創造ということであります。すなわち、社会に必要な価値を創造し、健全な価値を提供し、あるいは還元していくというのが、創価大学の本来目指すものでなければならない」(1973 年 4 月)と。

この価値を創造する本学の使命は、「教育」「文化」「平和」に関する 3 つの建学の精神として示された。

2010 年、今また創立者は、現代社会は「価値空位の時代」にあるとして「新たなる価値創造の時代へ」との提言を発表した。その中で、金銭がすべての尺度といった経済的能力を専ら人間の価値基準に置く社会、あるいは肥大化する欲望とセットになった科学技術の暴走など、健全な価値観を欠く虚無的な精神の蔓延が、社会の衰勢や閉塞を招くと指摘している。実際、市場原理主義のグローバリゼーションがもたらした格差社会は、世界各地で貧困やテロの要因となり、さらに先進国と開発途上国間の相克が環境問題へのアプローチを複雑化させるなど、地球的規模で困難な問題を惹起している。こうした諸問題群に立ち向かい、「価値空位の時代」に楔を打ち込むために「善の価値」を創造し、提供しゆく人間が必要である。本学が取り組む人間教育において、この価値を創造する「創造的人間」を育成していくことが、開学以来の変わらぬ使命である。

2020 年、創立 50 周年のときには、本学がその使命を実現している大学であることを高らかに宣言したい。それは創立者が草創期に語った「これからなさねばならない壮大な人類の戦いの一翼を、創価大学が担うならば、そして、少なからぬ貢献をなしうるならば、創価大学の開学の趣旨も結実したと、私はみたいと思うのであります」(1973 年 4 月)という姿でもある。

今、再び本学の使命を確認し、創立 50 周年へ向けて、ここに「創価大学グランドデザイン」を策定し、その将来像を明らかにしていく。

創立 50 周年の創価大学の姿、それは「創価大学はどんな大学か」との問いかけに、率直に答えられる内容でなければならない。これまでの伝統と実績を検証しつつ、次の 3 点を骨格としてグランドデザインに関する具体的な議論を重ねてきた。

- ・建学の精神を根本に本学で学んだ人材を社会に輩出する使命
- ・その人材を養成するための具体的な教育・研究システム
- ・その教育・研究をサポートする大学の総合的な環境の整備

このグランドデザインの策定にあたっては、その目標を極力具体性のあるもの(たとえば数値目標など)として明確にしていくことを心がけた。また、グランドデザインをもとに中期計画あるいは単年度アクションプランを今後示していきたい。毎年発表される「教育ヴィジョン」は、そのアクションプランと位置づける。

これらの全体的な取り組みのためには、建学の精神に共鳴し集い来た本学の教職員・学生各位の参画が必須条件となる。一人ひとりが若き創価大学創立者との自覚に立ち、新たな歴史を築く当事者として、この事業に取り組んでいきたい。

## 創価大学グランドデザイン

2007年8月、本学は、創立50周年を目指した全体構想を策定するため、「創価大学グランドデザイン策定委員会」及び「創価大学グランドデザイン推進室」を設置した。これらの機関により「グランドデザイン」の策定は、以下の4点を視点にスタートした。

### 【創価大学グランドデザイン策定の視点】

- 1 中長期的に本学の競争的優位性(強み・特徴=存在価値)を確保するとともに、さらにその優位性と内外の認識を高める。
- 2 大学に求められる質の保証、社会貢献など基本的な社会的責任を果たすのみならず、良質な教育・研究成果を提供することを内外に明らかにする。
- 3 各組織・部局に共通のヴィジョンを提示することで、理念の統合化を図る(ヴィジョンによる自律型組織構築)。
- 4 問題対処型から、到達点明示による目標達成型組織へ移行する。

グランドデザインの策定にあたっては、創価大学のブランド戦略(ブランディング)を強く意識して検討を進めることになった。その後、関係者の協力を得て創価大学グランドデザインコンセプトブックを作製し、本格的にブランディングへの取り組みを開始した。

このブランディングの一環で、対外的に発信する際の「創価大学」のロゴデザインを明確にした。また、本学のグランドデザインコンセプトの基本方針として、ステートメント(ブランディングの一環で、本学が対外的に発信する声明)を作成した(下記、枠内)。こうしたブランディングによって、本学はグランドデザインを効果的に発信するモデルを得たのである(図1)。

【創価大学グランドデザインのコンセプトとステートメント】

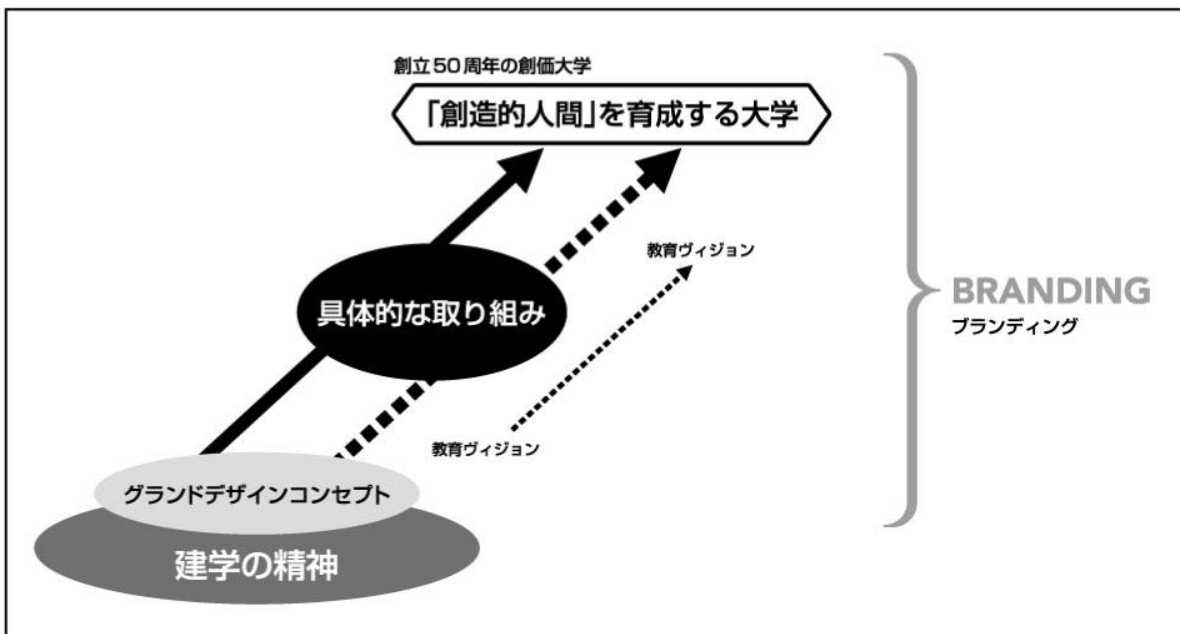
・グランドデザインコンセプト

「創立者池田大作先生が提唱された『創造的人間』の育成を実現する最高学府としての責任を担い、『創価大学らしさ』が『創価大学の競争力』として評価されるための具体的な取り組みによって、創価大学の価値を社会や歴史に刻む」

・ステートメント

「Discover your potential 自分力の発見」

【図 1 創立 50 周年を目指した創価大学の戦略モデル】



グランドデザインコンセプトの「創造的人間」の育成については後述するとして、ここではステートメントにふれる。このステートメントはグローバル化する社会に対応するため、国外に向けては英語を使用するものとし、国内に対しては英語と日本語を併記するようにする。「your potential」とは、「一人ひとりのもっている可能性」を意味する言葉として日本語では「自分力」と表現した。

これまで本学は、1998 年より毎年、単年度の教育目標を提示するものとして「創価大学教育ビジョン」を学長名で発表してきた。初回発表から 10 年継続した教育ビジョンは、今後、グランドデザインとの関係において「アクションプラン」と位置づけられる。長期的なグランドデザインと教育ビジョンは相乗的な効果を生む関係となる。そして、グランドデザインと教育ビジョンを連動させ、PDCAサイクルによって継続的かつ効果的な事業を展開していく。

## 創立 50 周年の創価大学像

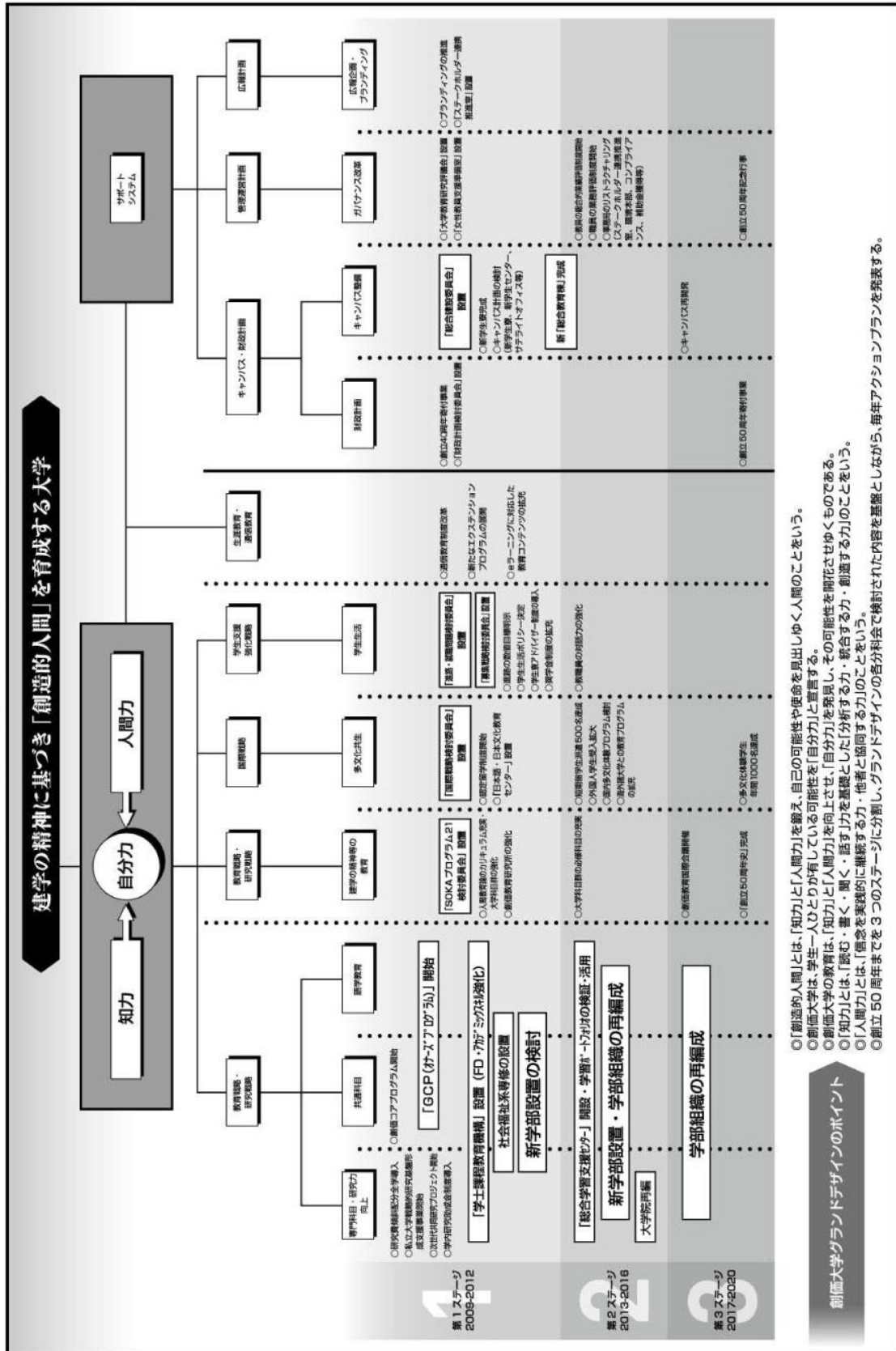
少子化が進行する日本にあって、本学が競争的環境下で選ばれる大学であるためには、どのような戦略を立案・実行するのか——今回のグランドデザインの策定にあたって、7 つの分科会(教育戦略、研究戦略、学生支援、国際戦略、広報戦略、管理運営政策、キャンパス・財政計画)を設け、2008 年 2 月から約 1 年間、集中的に議論した。分科会では、創価大学の発展を考えるにあたり喫緊の課題から議論が進んだ。

多岐にわたる分科会の提案やグランドデザイン策定委員会での議論を受け、一貫性や整合性を保ち全体構想を完成させるため、2009 年 2 月に「創価大学グランドデザイン総合戦略会議」が設置された。この会議では、全体構想に必要な目標・方針・重点項目について集中的に討議が行われた。

また、生涯教育・通信教育の分野については、2007 年に「通信教育部改革推進委員会」が設置され、継続的に今後の通信教育の在り方等について議論がなされてきた。

こうして学内で検討されてきた内容を、教育戦略・研究戦略、国際戦略、学生支援強化戦略、生涯教育・通信教育と、それをサポートするキャンパス・財政計画、管理運営計画、広報計画に分けて、2020 年までの具体的な取り組みの全体像を明らかにした(図 2)。

【図 2 創立 50 周年の創価大学像と創価大学グランドデザイン】



総合戦略会議では、この2年間の真剣な議論をふまえ、創立50周年の創価大学像を以下のとおり決定した。

## 創立50周年の創価大学 ― 建学の精神に基づき「創造的人間」を育成する大学

### 【創価大学 建学の精神】

- 一、人間教育の最高学府たれ
- 一、新しき大文化建設の揺籃たれ
- 一、人類の平和を守る要塞(フォートレス)たれ

この建学の精神は本学における原点であり、これを基盤に「創造的人間」を育成し、社会に優れた人材を輩出することが変わらぬミッションである。

「創造的人間」はいかなるものか。まず、「知力」と「人間力」がその基礎をなすと考え、この「知力」と「人間力」を鍛える中で、自己の可能性や使命を見出していくのである。本学は、学生一人ひとりが有している可能性を「自分力」と宣言する。本学の教育は、「知力」と「人間力」を向上させ、「自分力」を発見し、その可能性を开花させゆくものでなければならない。このように「創造的人間」とは、「知力」と「人間力」を鍛え、間断なき自己との闘争を繰り返しゆく存在であり、本学はこうした人材を輩出することを目指していくものである。

### 「創造的人間」となるための「知力」「人間力」とは

本学における「知力」と「人間力」とは何か。そして、どのように定義するか。この点について創立者の草創期のスピーチを確認した(巻末参照)。

「知力」については、知的基盤を堅固なものとしていくことであり、基礎学力をしっかりと身につけることの重要性が指摘されている。本学は学生の基礎学力として、「読む・書く・聞く・話す」力を養成し、これを土台にして「分析する力・統合する力・創造する力」へと応用していくことを目指す。この「分析する力・統合する力・創造する力」を「知力」として定義する。

「人間力」については、その根底に「信念」や「使命感」を確立していくことが重要な課題であると指摘されている。何のために何を学ぶのか——目的意識とその目的達成のための勉学が強く結びつくようではなければならない。教員と学生や学生間の練磨、すなわち「聞く」力を土台にしなが、他者とのコミュニケーションを図ることによって、使命感は触発され、その使命の達成のために、自らの行動を省察する機会を与えることが本学に求められている。

一人ひとりの「信念」や「使命感」は、常に人類や社会と向き合うべきものである。そうした視座は、創価大学学則の目的にも「文化の発展と人類の福祉に貢献するもの」と明記されている。

結論として「人間力」は、いかなる困難にあっても価値の創造をやめない「信念を実践的に継続する力」、豊かな人間性を基盤として、人類が直面する問題に真摯に取り組み、智慧を発揮していく「他者と協同する

**力」と定義する。**

このグランドデザインを策定するにあたり、本学の教職員・学生をはじめ、卒業生や保護者等、多くの方々に協力をいただき、インタビューを実施した。開学時から現在、そして未来の創価大学をつなぐキーワードは「創造的人間」であるという結論に至った。そこで、「創造的人間」とはどのような要素で構成されているのかを検討し、その要件に言及した 1996 年のコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジにおける創立者の講演等を参考にしながら、本学関係者へのインタビューで得られたイメージを集約していった(図 3)。このように多様な要素をもつ「創造的人間」を育成するために、「知力」「人間力」を向上させていこうというのが、本学のグランドデザインなのである。

【図 3 「創造的人間」の構成要素】



**「知力」「人間力」向上のための具体的な目標と取り組み**

さて、「知力」「人間力」をどのように向上させていくのか。まず、その取り組みを検討するにあたり、2009 年から創立 50 周年を迎える 2020 年までの 12 年間で 3 つのステージに分割し、各ステージにおける目標を、これまでの各分科会の議論をもとに設定した(図 2)。



## 「知力」について

本学でいう「知力」とは、具体的には「読む・書く・聞く・話す」という基礎学力の強化によって養成する「分析する力・統合する力・創造する力」のことをいう。本学は「知力」の向上のために、学士課程教育のいっそうの充実を図り、共通教育・FDの改革を継続し、学生一人ひとりが学習基礎力を身につけられる教育システムを構築する。

創造性を構成する要素として、「知識」と「知恵」は不可欠な要素である。大学において学生が「知識」を獲得し、「知恵」を育むためには、まず学生一人ひとりの学習基礎力を強化し、学習時間を増やす取り組みが基本である。このため「知力」向上の具体的な数値指標を今後設定し、取り組みの可視化に努めていく。

数値目標の設定の他、「知力」向上のための具体的な取り組みとして、以下の 3 点を掲げる。

- ①「学士課程教育機構」の設置による教育システム・プログラム開発
- ②「総合学習支援センター」における学習サポート体制の充実
- ③学部組織の再編成

### ①「学士課程教育機構」の設置による教育システム・プログラム開発

本学は 2009 年度から「創価コアプログラム」を導入し、共通科目の体系化、充実を図ってきた。また、初年次教育・導入教育についても「共通演習」の全学的な展開などをとおして、学習基礎力を身につけさせる努力を重ねている。さらに新たな取り組みとして「Global Citizenship Program (GCP)」というオナーズプログラムを 2010 年度からスタートさせるなど、教育を重視した各種の改革を行っている。

今後、「読む・書く・聞く・話す」力を強化する施策を重点的に行うにあたって、2010 年度より新たに「学士課程教育機構」を設置する。この機構は、本学の学士課程教育の質的向上を目指して、それに必要なプログラムの開発と授業展開、評価・改善に取り組む。「学士課程教育機構」には専任教員も配置し、この組織が中核となって、本学の目指す「知力」を身につけさせる施策を展開していく。

また、本学のFD活動は、これまで「教育・学習活動支援センター (CETL)」が中心となって取り組んできた。2008 年度からは全学及び各学部にてFD委員会が設けられ、さらに活発なFD活動を期しているところである。今後はこれらの活動が「学士課程教育機構」と協働することによって、学生の学びに対する質の保証を強化していく。「学士課程教育機構」は、従来の「共通科目運営センター」「ワールドランゲージセンター (WLC)」「教育・学習活動支援センター (CETL)」を統括することになる。

### ②「総合学習支援センター」における学習サポート体制の充実

「学士課程教育機構」で取り組む学習支援を一元化し、新「総合教育棟」の完成 (2013 年予定) を目標に、「総合学習支援センター」を設置する。この新組織では、「分析する力・統合する力・創造する力」を養うためのライティングスキルの強化の他、語学力向上や学生が学習基礎力を身につけるためのサポートにあたる。

この他、「学生ポートフォリオ」が、2010 年度より全学部で導入される。これは、教員による学業指導にも活用する予定であり、「総合学習支援センター」の設置に向けて、着実に学習サポート体制を充実させていく。

### ③学部組織の再編成

大学設置基準の大綱化以降、多くの大学が学部学科の改組転換を弛みなく続けている中において、本学は 1991 年の工学部の設置を最後に新学部は設置されていない。ただし、学科については、工学部環境共生工学科の設置、文学部人間学科設置などの改組転換を行っている。経済学部のインターナショナルプログラムの GP 採択の他、経営学部のグローバルプログラム、文学部のデュアル・ディグリーコース等の国際性に富む取り組みが、本学の特色の柱となりつつある。改組すればよしとするものではないが、こうした様々な取り組みが、学内に新風を吹き込み、多彩な人材を輩出してきた。創立 50 周年へ向け、発展しゆく創価大学像を内外に明示するために、幾度かにわたり改組を進めることが必要である。

第 1 ステージでは、文学部に社会福祉系の専修を新たに設置する予定である。社会福祉の分野に関心のある学生も多く、2011 年度入学生より、福祉系の資格取得が可能な環境を整備していきたい。

さらに、新「総合教育棟」の完成にあわせて新学部の設置を目指したい。今後、本学の教育資源と社会のニーズを検討して、教学組織の再編成の方向性を提示する。

### 「人間力」について

「人間力」は、いかなる困難にあっても価値の創造をやめない「信念を実践的に継続する力」、豊かな人間性を基盤として、人類が直面する問題に真摯に取り組み、智慧を発揮していく「他者と協同する力」と定義した。この「人間力」向上のための具体的な取り組みとして、以下の 3 点を掲げる。

- ① 「SOKA プログラム 21(自校教育)」の体系化
- ② コミュニケーション能力の向上
- ③ 国際戦略の推進

#### ①「SOKA プログラム 21(自校教育)」の体系化

「人間力」については、信念や使命感をもち、自らの掲げた目標に向かって努力を続けながら、他者を理解しコミュニケーション力のある学生の育成が重要となる。そこで、学士課程教育の中で「建学の精神」や「人間主義」等を根幹にした科目群を「SOKA プログラム 21」として体系化する。この「SOKA プログラム 21」の体系化にあたっては、「創価教育研究所」がその中心的役割を担うが、この問題を全学的に検討する組織として「SOKA プログラム 21 検討委員会」を設置した。今後、創立者の思想と実践に関する研究を基盤として、広く「平和」「文化」「教育」の領域に展開し、先端的な地球的諸問題への取り組みまでを視野に入れたプログラムを構築していく。創立者の理念を学ぶことのできる国内唯一の高等教育プログラムとして、本学の特色ある教育の軸に据え、「人間力」向上の基盤としていきたい。

#### ②コミュニケーション能力の向上

「人間力」の向上のために、プロジェクト・ゼミやディベート、協同学習等の教育方法を積極的に用いることでコミュニケーション能力やリーダーシップを養っていく。これらは、「学士課程教育機構」が推進役となる。また、前述したが 2010 年度より「学生ポートフォリオ」が全学的に導入される。目標達成方法、進捗管理等のス

キルを身につけるとともに、学生同士の支援(ピア・エデュケーション)でも活用される。こうした学習を通じた身近な学生とのコミュニケーションも、その能力向上の一助としていきたい。

これまで本学では、寮生活やクラブ活動、各種行事の運営など学生主体の諸活動の中で、一人ひとりの人間性が豊かに育まれてきた伝統がある。しかし、多忙な学生生活によって多様化する社会との接点が少なくなつてはならない。したがって、他大学との積極的な交流による人的ネットワークの構築も推進する。学内外のネットワークを有効に活用し、国内でも多くの刺激を学生に与え、「人間力」を高めていけるようにしたい。他者と共感できる点を見出すことは、協同する力を養う第一歩と考える。

### ③国際戦略の推進

本学は、異文化交流の機会を計画的に拡大することによって、多様な世界の価値観を体験的に学ぶシステムを構築する。そのために、短期・長期の留学制度を拡充し、より多くの学生が海外へ渡航できる機会を提供していく。また、外国人留学生を本学に多く受け入れることによっても、異文化交流の機会が増える。このため、外国人留学生の受入拡大にも積極的に取り組んでいく。例えば、数値目標として各学年 1000 名規模の海外留学経験者を輩出することなどが考えられる。これは各学年の在籍者の 5 割を超える。こうした本学の国際戦略は、「国際戦略検討委員会」で検討がなされている。

## サポート体制の充実

グランドデザインでは、「創造的人間」の基礎をなす「知力」と「人間力」を向上させる取り組みを、図 2 のとおり、4 つの戦略(教育、研究、国際、学生支援強化)に分け、さらにその内容によって細分化した。また、これらの戦略の推進にあたっては、確かな経営基盤を構築しつつ、ガバナンスの強化や施設の充実によってサポートしていく。

確かな経営基盤の構築のために、今後、「財政計画検討委員会」を設置する。本年 2 月に「創立 40 周年記念寄付事業」を開始したが、本学をご支援いただいている方々の期待に応えるためにも、経営力もいっそう強化していく。ガバナンスについては、2010 年度より、従来の「全学教授会」にかわる機関として「大学教育研究評議会」を設置する。また、「学長室会議」を新設し、意見の集約・調整等、学内のコミュニケーションの円滑化にも努める。

総合的な教育環境の整備では、2013 年の完成を目指して、新「総合教育棟」がいよいよ着工される。この新「総合教育棟」の建設にともない、創立 50 周年を迎えるにふさわしいキャンパス・アメニティーの検討がなされていく。

そして、グランドデザイン全体をとおして、本学の将来像を明らかにしていくとともに、戦略的な広報計画を立案し、本学のブランドを確立・発展させていく。対外的に発信するステートメントに加え、ステークホルダーの記憶に残るアイテムの開発を行い、本学のロゴやデザインの仕様等も統一感のあるものへと改善していく。

このように、「知力」と「人間力」を鍛える取り組みを全学挙げて多角的に充実させていく中で、各々が「自

分力」を発見し、学生一人ひとりが「創造的人間」へと成長していくのが、今後の本学の教育目標である。グランドデザインの様々な施策は、正課内の活動を中心とした取り組みが多いが、「創造的人間」の育成にあたっては、当然、正課外における学生生活の充実も欠かすことはできない。例えば、読書を通じた自身の内面との対話も、その一つであろう。

創立 50 周年の創価大学像を具現化していくために何をすべきなのか、学生・教員・職員がそれぞれの立場で考え語り合い、さらに本学のよき伝統である教・職・学が一体となって、「創造的人間」を育成する大学の建設に邁進してまいりたい。

「理念の共有から実践の共感へ」——本学が多くの人々に選ばれ続けるために、創価大学は大きな一歩を踏み出す時を迎えた。

## まとめ

最後に、創立 50 周年の創価大学像と創価大学グランドデザインについて、以下に簡略にまとめる。

- 1 創立 50 周年の創価大学は「建学の精神に基づき『創造的人間』を育成する大学」となる。
- 2 創価大学は、学生一人ひとりが有している可能性を「自分力」と宣言する。
- 3 創価大学の教育は、「知力」と「人間力」を向上させ、「自分力」を発見し、その可能性を開花させゆくものである。
- 4 「知力」とは、「読む・書く・聞く・話す」力を基礎とした「分析する力・統合する力・創造する力」のことをいう。
- 5 「人間力」とは、「信念を実践的に継続する力・他者と協同する力」のことをいう。
- 6 創立 50 周年までを 3 つのステージに分割し、グランドデザインの各分科会で検討された内容を基盤としながら、毎年アクションプランを発表する。
- 7 創立 50 周年の創価大学像とグランドデザインを効果的に発信し、創価大学のブランド力を向上させる。
- 8 教職員は、全学的な取り組みはもとより、各学部・各部課・個人において、創立 50 周年を目指した創価大学像の具現化のために、間断なき努力を続けていく。

## 【参考】 草創期の創立者のスピーチ（抜粋）

### 知力・人間力

「もとより、大学が社会に貢献し、国家、世界の進歩・発展に役立つ人材を育成することを目指すのは当然であります。大学といえども社会、国家の現実から遊離したものであってはならないことはいうまでもありません。だが、真に役立つ人材とは、単に知識や技術に優れた人間ではない。それだけであっては、国家社会の巨大なメカニズムの一部を構成する部品にすぎない。真に望まれる人材とは、高い理念をもった優れた人格者であり、豊かな個性をもち、そのうえで学問、技術を使いこなしていける革新的にして創造的な人間であると考えますが、いかがでありますか」

創価大学設立構想(1968年5月3日)

「人間の頭の程度というものは、一般的な学問も普及されているし、ほんの一握りの特別な人を除いて、さほどの違いはない。ただ、一番大切なことは何か。それは目的をもっているか、いないか。使命感をもっているか、いないかである。それで大きく変わってしまう。あとは基礎の勉強というものをどれだけ努力してやったかどうかです。

社会に出た場合に、必要なことは、荒れ狂う怒涛の渦中に入っても、鋭く分析し、統合し、乗り越え、そして創造していけるかいないかである。その意味において、今は何はさておき、いわゆる頭を強くしなければならぬ。基礎勉強だけは、全力をあげて取り組まなければ、十年先、二十年先に、必ず不幸を感じ、後悔いたします」

第1回滝山祭(1972年7月6日)

### 知力

「私がここで皆さんに申し上げたいのは、歴史を動かす要因は、自由なる人間の思索であり、生命力の潮流であるということでもあります。一つの文明が興隆していくには、そして更に、それが永続し、広い範囲にわたって影響を与えていくには、深い思想的遺産を、その基底部にもっていなければならない。天才といえども、この時代的、思想的基盤なくしては生まれえないし、仮に生まれたとしても、なんらその能力を発揮することは出来ない。更にまた、力の論理のみで築き上げられた社会、機構は、真実に人々の生活に影響を与え、歴史に光りを残す存在とはなりえないと思うからであります」

第3回入学式(1973年4月9日)

「我が創価大学の『創価』とは、価値創造ということであります。すなわち、社会に必要な価値を創造し、健全な価値を提供し、あるいは還元していくというのが、創価大学の本来目指すものでなければならない。したがって、創価大学に学ぶ皆さん方は、創造的な能力を培い、社会になんらかの意味で、未来性豊かに貢献していく人となっていただきたいのであります。

『創造』ということは、たんなるアイデアとは違うものであります。しかし、一つのアイデアを生むことさえも、それには基礎からの十分な積み重ねが要求される。学問における創造は、それとは比較にならないほど基礎的実力を要求するのはいうまでもない。創造の仕事は高い山のようなものであり、それだけの高さ  
に達するには、広い広い裾野と堅固な地盤を必要とする。幅広い学問知識と深みのある思索の基盤のうえ  
に、初めて実りのある創造の仕事が出来るわけであります」

第 3 回入学式(1973 年 4 月 9 日)

「創造性を養うには、精神的な土壌が豊潤であることが必要であります。そして、それは精神の自由度という言葉で表せるのではないかと思う。精神が抑圧され、あるいは歪曲されているところに、自由な発想も、独創的な仕事も成される道理がない。精神が解放され、広い視野をもっているとき、そこには汲めども尽  
きない豊かな発想が出てくるのであります」

第 3 回入学式(1973 年 4 月 9 日)

「精神の自由度という言葉は、精神の放縦ということとは違うのであります。一方に、自由な、伸び伸びとした精神活動を要求しているのも事実ではありますが、更に、それにとどまるのではなく、高い自由規律  
に基づいた精神の開発をも意味していると考えるべきであります。

勝手に考え、自由に振る舞うのが精神の自由ということではない。発想し、対話し、研磨しあうこと  
によって、自らの視野を拡大し、より広い、より高い視点に立って物事を洞察していくことこそ、精神の自由を  
真に拡大する道ではなからうかと、私は思うのであります」

第 3 回入学式(1973 年 4 月 9 日)

「真実の学問とは、詮ずるところ、この自己への“知”にある。創価大学が目指す学問、教育の理想も、こ  
こにあるといつてよい。“力”への学問においては、優れた大学や研究機関が世界に数えきれないほどあるでありましよう。だが、それらは人間に何をもたらしたか。それは、惨憺たる現代文明の虚像ではなかつたかとも、みえるのであります。

諸君の使命は、あらゆる“力”を人間の幸福と平和のために使いこなす“知恵”を、身につけることにある  
と言いたいのであります。それは「汝自身」を知り、それに結びついた形で、学問を究めることでもあります。  
それが自分に、すなわち人間にとってどういう関係にあるか——すべてをここに引き戻して知識、技術、芸  
術の再編成をするとともに、新たな人類の組成を、もたらしていただきたいのであります」

第 4 回入学式(1974 年 4 月 18 日)

## 人間力

「目標が大きければ大きいほど苦難の道です。それを乗り越えた人が一流の人であります。これが自分  
の一生の道だと決めたら、苦難を避けるのでなく、虚栄をはるのでなく、その道で、その立場で、まず人間として、その職業の道を路線として、断固として、精進し、奮闘されんことを祈りたい。そうした苦難をのりこ

えなければ、本物ではないと思う。それが人間教育の原点です」

第 2 回創大祭(1972 年 11 月 24 日)

「いうまでもなく、創価大学は、皆さんの大学であります。同時に、それは、社会から隔離された象牙の塔ではなく、新しい歴史を開く、限りない未来性をはらんだ、人類の希望の塔でなくてはならない。ここに立脚して、人類のために、社会の人々のために、無名の庶民の幸福のために、何をすべきか、何をすることが出来るのかという、この一点に対する思索、努力だけは、永久に忘れてはならないことを、申し残させていただきます」

第 3 回入学式(1973 年 4 月 9 日)

「私は、私の信念として、諸君のためには、いかなる労苦も惜みせず、新しき世界への道を開いてまいりたいと思っております。私が、世界の人々のなかを駆けめぐるその胸中には、常に大切な、そして心より信頼する諸君の存在があったことを知っていただきたいのであります。どうか、諸君は私の今打っている“点”と“点”とを“線”で結び、更にそれを壮大な立体とした世界の平和像をつくりあげていってほしいのであります。これは、私の諸君に対する遺言と思ってください。お願いします」

第 4 回入学式(1974 年 4 月 18 日)

「私の胸にあふれてやまぬ“創造”という言葉の実感とは、自己の全存在をかけて、悔いなき仕事を続けた時の自己拡大の生命の勝ちどきであり、汗と涙の結晶作業以外の何物でもありません。“創造的生命”とは、そうした人生行動のたゆみなき錬磨のなかに浮かび上がる、生命のダイナミズムであろうかと、思うのであります。

そこには嵐もあろう、雨も強かろう、一時的な敗北の姿もあるかもしれない。しかし“創造的生命”は、それで敗北し去ることは決してない。やがて己の胸中に懸かるであろう、さわやかな虹を知っているからであります。甘えや安逸には創造はありえない」

第 4 回入学式(1974 年 4 月 18 日)

「逆境への挑戦を通して開かれたありとあらゆる生命の宝をみがき抜くにつれて、人間は初めて真の人間至高の道を歩み行くことができると、私は確信するのであります。故に、現代から未来にかけて“創造的生命”の持ち主こそが、歴史の流れの先端に立つことは疑いない、と私は思う。

この“創造的生命”の開花を、私はヒューマン・レボリューション、すなわち『人間革命』と呼びたい。これこそ諸君の今日の、そして生涯かけての課題なのであります」

第 4 回入学式(1974 年 4 月 18 日)

「この祝典を通過することによって、一人前の立派な独立社会人となる諸君に対しまして、私は懐かしき私の恩師の言葉をもってはなむけとしたい。それは『社会に信念の人を』という提言の主張であります。今から二十年前の社会に対しての提言であり、今日のような働き過ぎが問題になったり、職場管理の合理化



からきた人間疎外現象が問題になったり、当時とは相当に様子の違った点がありますが、それにしても、この恩師の説は大体、現在にも当てはまると私は思っております。

社会に出たての青年時代は、なにか未知への不安心理を抱えてはいるが、それにもまして希望に燃え、張り切っているものであります。ところが、“社会慣れ”して中年に近づくと、いわゆる“物足りない”という姿を見せるようになってくる。生涯の信念というものを持ちあわせていない人は、そうになってしまうのであります。どうか諸君は、正しく深い信念を根底に堅持し、それによって、この風波の高い大海にも似た実社会を生き抜かれんことを、ひたすらに私は祈ります」

第 1 回卒業式(1975 年 3 月 22 日)

創価大学

〒192-8577 東京都八王子市丹木町1-236  
Tel: 042-691-9501 Fax: 042-691-9300  
[www.soka.ac.jp/](http://www.soka.ac.jp/)